

川まちづくりにおける 地域社会の協働過程に関する研究

岩田 圭佑¹・田中 尚人²・馬場 啓維³

¹学生会員 熊本大学大学院 自然科学研究科 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2-39-1)

E-mail:080d9402@st.kumamoto-u.ac.jp

²正会員 熊本大学政策創造研究センター 准教授 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2-39-1)

E-mail:naotot@kumamoto-u.ac.jp

³熊本市西部土木センター

近年、市民参加のまちづくりや住民主体のまちづくりなど、地域社会が協働してまちづくりを進めていくことの重要性が問われている。また、川づくりをまちづくりの一環として行う「川まちづくり」の重要性も問われている。このことから、今後の川まちづくりにおいて地域社会が協働していくために、これまでの川まちづくりにおいて地域社会が歩んできた過程を見直し、今後の川まちづくりにおいて地域社会が協働を図る方法を見出す必要があるといえる。本研究では、地域社会の可視化手法を提案し、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察することを目的とする。そのためにまず、柳川と広島を対象に、川まちづくりに関わる様々な地域社会の活動の過程を整理する。次に、それらの活動について、グループ・ダイナミクス理論を用いて、活動の過程を可視化する。そのうえで、グループ・ダイナミクス理論における地域社会の活動の集合流という概念を分析し、地域社会の協働に必要な要件を考察する。

Key Words : *community development, waterfront, collaboration, group dynamics,*

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

水辺におけるまちづくりのプロセスについては、まちづくりの中で川づくりをどのように位置づけるかを論じた樋口らの研究¹⁾や、行政と住民による事業計画策定から管理運営における協働関係に着目し、都市河川整備を契機として進んだまちづくりの展開を明らかにした出口らの研究²⁾などがあげられる。これらの研究は、特定の河川整備事業を視点にまちづくりの在り方や協働のあり方を論じている。

一方で、日本各地の水辺において様々なまちづくり活動が見られるようになって久しく、それらの長期的な評価も可能になってきているが、河川整備などの事業に偏っていない、川まちづくりに関わる地域社会全体の動態についてはこれまで研究対象にされてこなかった。このように地域社会全体にとっての水辺の重要性を明確に示すことは、今後の川まちづくりにおいて有益な資料となり得る。このことから、川まちづくりに関わる地域社会

全体の動態を可視化することによって、川まちづくりのプロセスを整理し、地域社会全体の変化や協働に関して分析することが出来ると考える。そこで本研究では、地域社会の可視化手法を提案し、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察することを目的とする。

(2) 研究の手法

研究対象地は、太田川のデルタ地帯に位置する広島県広島市と、掘割が巡る福岡県柳川市とする。都市の規模や水辺の空間特性の違いが、地域社会の動態に与える影響を考慮するためである。研究手法は、まず2章において、近年の川まちづくりにおける地域社会の活動を過去の新聞記事に求め、データベース化しその変遷を整理する。次に3章では、活動の変遷をグループ・ダイナミクス(以下G・D)という理論に基づいて可視化する手法を提案する。4章ではG・Dを用いて地域社会の動態と活動の構造の変化を分析し、地域社会全体にとっての水辺の役割を明らかにし、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察する。

2. 近年の川まちづくりにおける 地域社会の活動の変遷

(1) 本研究における地域社会の定義

本研究では、地域社会を「川まちづくりをフィールドとして活動する組織が形成する仕組みや関係性の総体」と定義した。さらに、川まちづくりをフィールドとして活動する主体の組織を以下の3つに分けて定義した。

- 1) **市民**：地域住民が地域内へ向けた活動を行うために自発的に発足させた、まちづくり活動を行う組織。
- 2) **行政**：国の機関や、県、市町村などの地方公共団体に属する組織。
- 3) **アソシエーション**：NPO や民間企業等の組織が集まり、地域内に向けた活動に限らず、地域外へ向けた活動も含み、川まちづくりをフィールドとした活動を行う組織。なお、民間企業の場合は、1つの企業はアソシエーションではなく、複数の企業の集まりをアソシエーションとする。

(2) 柳川の川まちづくりにおける地域社会の活動の変遷

筑後川と矢部川に挟まれ有明海を望む柳川は、繰り返される干満によってできた低湿地の上に成立している。柳川の水郷としての特性は、柳川城築城に伴い建設された城堀や、有明海干拓に伴って造られた全長約 470km の掘割など、市全域に水路が網目状に発達していることである(図-1)。これらの水路網は、近世・近代を通じて築かれたものであり、農業の水源として利用されてきただけでなく、舟運や漁業などにおいて重要な役割を担ってきた。³⁾ この掘割を活かした柳川川下りは、水郷の町の風情を堪能できる観光の目玉となっている。現在柳川には7社、約200艘の舟が毎日観光客を乗せ、掘割を周遊しており、どんこ舟といわれる小さな船と船頭の語りと舟歌で図に示すような川下りコースを周遊する。

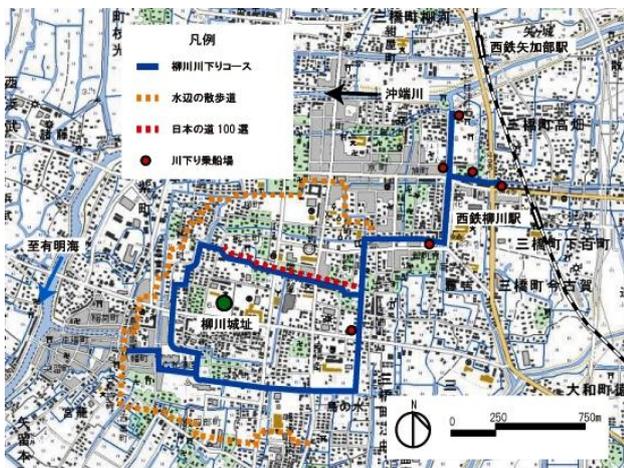


図-1 柳川市平面図(国土地理院 1/25000 地形図に筆者加筆)

(3) 広島市の川まちづくりにおける地域社会の活動の変遷

広島は瀬戸内海に面し、太田川の下流部が太田川放水路、天満川、本川、京橋川、元安川、猿猴川の6本の川に分かれたデルタ地帯に位置する都市である。市街地に占める水面積の比率が13%もあり、瀬戸内海の干満によって水位が変化する感潮河川であることが特徴である。水辺には、雁木などの歴史的遺構、連続した河岸緑地があり、観光施設や文化施設が立地している(図-2)。太田川は、古くから川舟による輸送路として利用され、上流からは木炭、鉄、紙などが運ばれ、材木は筏によって運搬されていた。現在は、主に観光を目的とした舟運に利用され、民間企業やNPO法人などが中心となって広島の水辺を周遊できる社会基盤が発達している。

(4) 地域社会に変遷に関するデータベース

本節では、地域社会の活動の内容を具体的に示すために、地域社会の活動の変遷についてデータベース(以下、DB)を作成した(表-1、表-2)。

DB化の際用いた資料は過去の新聞記事等である。新聞記事は、朝日新聞記事DB(KIKUZO-2 Visual for Libraries)と読売新聞記事DB(ヨミダス歴史館)を用いた。活動を調査する際は、各地の川まちづくりに関する活動について例えば、「掘割、活動」や「太田川、活動」などを検索キーワードとして検索した。その結果、柳川では、KIKUZO-2では222件、ヨミダス歴史館では121件ヒットした。また、広島では、KIKUZO-2では1170件、ヨミダス歴史館では352件ヒットした。これらの記事から、川まちづくりに関わる活動を柳川は30個、広島は65個の活動を抽出した。さらに新聞記事を読み込み、その活動の「中心となる地域社会」や「活動に参加した地域社会」、その活動は何を対象にどのような結果を見出すのかといった「活動の目的」を分析した。

近年の柳川の川まちづくりにおける地域社会の変遷に

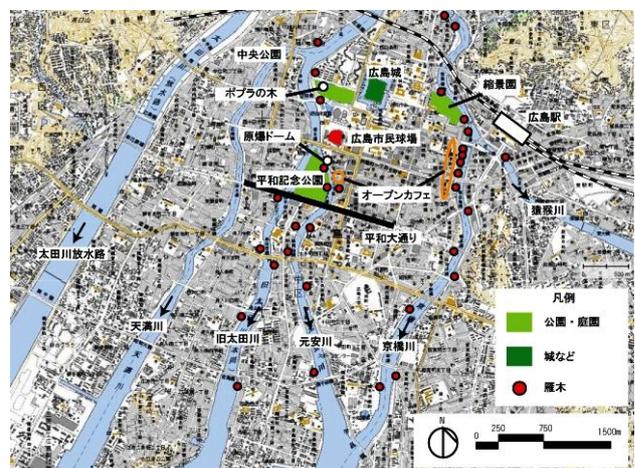


図-2 広島市平面図(国土地理院 1/25000 地形図に筆者加筆)

表-1 柳川の地域社会の活動のデータベース (新聞記事を基に筆者作成)

活動番号	活動	中心となる地域社会	活動に参加した地域社会	発足日	活動の目的(対象→結果)
1	「さげもんめぐり(柳川ひなまつり)	柳川市観光協会	柳川市の商店街	1950年代	観光客、地域住民へひな祭りを楽しんでもらう
2	白秋祭	柳川市観光協会	柳川市観光課	1952	地元住民、観光客へ北原白秋をしのぶ
3	水添ふ「掘りし」	市民	柳川の観光関係者	1961	掘割→川底に日光を当てて消遣、清掃する
4	川下り	柳川市観光課	柳川市観光課	1961	観光客→柳川の水辺を楽しんでもらう
5	川開き	市民	地元の観光関係者	1961	観光客→1年間の安全と観光の繁栄
6	日向神ダム建設	国土庁、福岡県	柳川市	1963	柳川市→安定した水の供給
7	幹線水路浚渫3カ年計画実施	柳川市	市民	1968	掘割→浚渫により浄化
8	河川浄化事業	柳川市	市民	1978	掘割→浄化
9	「水辺の散歩道」の整備	柳川市	なし	1978	観光客→一回遊べる空間づくり
10	歩行者専用道路事業	柳川市	なし	1980	観光客→一回遊べる空間づくり
11	水郷水都会議	委員会	柳川の観光関係者、柳川市民	1985	水環境→水質保全
12	筑後川フェスティバル	柳川青年会議所	流域市町村、柳川市婦人会、観光協会	1986	筑後川流域の人々→県境を越え、水の環境問題を考える
13	オヤニラミの稚魚放流	柳川市立矢留小学校	地元小学校	1990年代	掘割→良好な水循環
14	「水の会」発足	水の会	市民	1991	柳川→水の情報発信地にする
15	ホテルの幼虫放流	県ホテル連絡協議会	地元住民(大木町)	1995	掘割→ホテルのいる環境を取り戻す
16	待ちぼうけ像	柳川ロータリークラブ	九州グラフィックデザイン協会、彫刻家	1995	観光客→柳川を旅する人の心をいやす
17	ソーラーボート大会	実行委員会	全国から集まった参加者、専門家	1996	市民、参加者→ソーラーボートをきっかけに環境への関心を高める
18	「水憲法」制定委員会の発足	水憲法委員会	学識経験者、市議員、市の部長、商工会議所、農協、婦人	1997	まちづくり掘割を活かしたまちづくり
19	社会科授業で川下り	福岡・中央区警備小学校	小学生児童	1998	教育→フィールドワークを取り入れる
20	世界地方都市十字路会議	国土庁、福岡県、柳川市	国内外8都市	1999	掘割→守り、後世に引き継ぐ
21	掘割の一斉清掃	市民	柳川市	2000	掘割→歴史的な文化遺産としての価値や良好な水環境を後世に残す
22	まほろば水辺公園完成	柳川市	なし	2000	地域住民→水と環境に対する意識の向上
23	水辺のカウントダウン	沖覧会、柳川市沖覧地区の商店主	沖覧地区の商店主	2004	まちづくりイベントを通じてまちおこしにつなげる
24	外来生物調査	柳川市	環境省	2005	掘割→外来生物の有無を知る
25	児童の掘干し体験	小学校児童	不明	2006	小学生→掘干しを体験する
26	水のプランター設置	行政パートナー花いっぱい	柳川市	2008	観光客→柳川の観光を楽しんでもらう
27	水の上バスの実験	柳川市、川下り業者	柳川市、川下り業者	2008	観光客→川下りコースの途中で降りて市内回遊してもらう
28	掘りなおしネットワーク発足	掘りなおしネットワーク	運池掘割委員会、アクアリング委員会、堀と自然を守る会	2010	地域住民→水と環境に対する意識の向上
29	柳川 堀と道グリーンアップ大作戦	柳川市	商工会議所、観光協会、川下り会社、商店会など36団体	2010	観光客→もてなす気持ちを伝えるため
30	新しい体験型観光	INPO法人九州地域交流推進協議会	不明	2010	観光客→新たな楽しみ方を提案

※表中の色 地域社会:市民→赤 アソシエーション→黄色 行政→青

表-2 広島市の地域社会の活動のデータベース (新聞記事を基に筆者作成)

番号	活動	主体名	主体以外の集合体	発足日	目的(対象→結果)
1	広島県祭礼太田川花火大会	広島市観光協会	市民、観光客40万人	1965	観光客→花火を楽しんでもらう
2	扇揚げ大会	広島市西消防団	市民2000人、広島ニューライオンズクラブ	1971	市民→今年一年の用心を願う
3	第23回広島市民レガッタ	広島県ボート会	全国52チーム400人	1977	市民→太田川の活用
4	広島市民レガッタ2年ぶりの開催	広島県ボート会	参加者約200人	1977	市民→太田川の活用
5	散乱ごみ追放キャンペーン	きれいなひろしま・まちづくり市民会議	市民4300人	1981	広島市中心部→ゴミをなくす
6	クレーン太田川	クレーン太田川実行委員会	ボランティア団体、地元企業132団体、2万人	1988	太田川水系11市町村→太田川の水質を守る
7	太田川でミニ学芸	中国地方建設局太田川工事事務所	学識経験者、カメラマン、市民200人	1989	市民→太田川の水質について知ってもらう
8	イカダくぐりカワニナル	広島文化デザイン会議実行委員会	市民	1989	市民→太田川の水質について知ってもらう
9	定期遊覧船	広島リバークルーズ	広島市	1989	観光客、市民→水の上バスの運行で観光の活性化
10	太田川に魚道設置	中国地方建設局	広島県	1994	太田川→魚が上る環境を作る
11	太田川の自然と水を考える集い	漁業組合	市民	1994	市民→河川流域の自然破壊や生活を支える水の状態を話し合う
12	にいのぼり	建設省太田川工事事務所	幼稚園児160人	1994	市民→水と環境の大切さを知ってもらう
13	ゲンジボタルの幼虫放流	せせらぎの会	中国地方建設局太田川工事事務所	1995	川川せせらぎ河川公園→ホテルのいる美しい川にする
14	防災訓練	広島市	陸上自衛隊第十三師団、島根県、賀茂茂行政総合消防団	1995	市民→一師団大規模な訓練を活かす
15	ヤマザクラの苗木植樹	広島市かき養殖連絡協議会	会員	1996	漁業→かき養殖を守る
16	元安川新水テラス整備	建設省中国地方建設局太田川工事事務所	広島市、商店街振興組合連合会	1996	市民→水辺に近づけるように
17	17スズキの稚魚放流	水産振興協会	?	1997	漁業→栽培技術の開発
18	太田川河川にもモニターサミット	中国地方建設局太田川工事事務所	小中学生・父母約140人	1997	子供→太田川の水質を守る
19	防災訓練	消防	警察、自衛隊、企業、市民など2300人	1998	市民→大規模な訓練を受ける
20	ソラフエスティバル	同実行委員会	市民	1998	市民→大規模な訓練を受ける
21	河原の清掃活動	広島市漁業協同組合青年部	市民	1999	太田川→環境保全
22	第2回川での福祉と教育の全国交流会	INPO、障害者約300人	読売新聞広島総局などが後援	2000	参加者→一人ひとりの親しい付き合い方について考える
23	太田川の水辺サロン	実行委員会主催	住民団体、市民	2000	市民→川を通じて交流を深める
24	地球に優しいinひろしま2001	実行委員会主催	?	2001	太田川→水質保全のための募金、太田川源流への植林
25	川の情報「Go!Go!ルーム」オープン	国土交通省太田川河川事務所	?	2001	行政→地域に開かれた行政
26	みずウォーク2001広島大会	広島TV、読売新聞、日本ウォーキング協会	参加者	2001	参加者→水辺に親しみ健康ウォーク
27	吉野川から太田川の明日を考えよう	INPO法人環・太田川	市民	2001	市民→太田川を良くするための住民のアプローチの場の提供
28	水の都作戦会議	国土交通省太田川河川事務所、県、市	市民	2001	市民のアイデア→広島市の川まちづくりを活かす
29	水の都フォーラム	国土交通省太田川河川事務所	市民団体メンバー120人	2002	太田川周辺→川や川辺を活かしてまちを活性化する方法を話し合う
30	市民レガッタアンケート	広島県ボート会	参加者	2002	参加者→広島レガッタの存続のための打開策を募る
31	太田川子供モニターのつどい	国土交通省太田川河川事務所	小中学生約20人と家族	2002	市民→周辺の自然を1年間観察し、疑問や意見を報告してもらう
32	ポプラ付近の川沿いの通りの命名運動	市民グループ「セアック」	セアック「まちと人をつなぐ」ひろしま通り活用委員会	2003	ポプラ付近の通り→素敵な場所を多くの人に知ってもらう
33	アサ作り教室	太田川に革命を呼ぶ会	家族連れ参加者約80人	2003	市民→川の環境を考えるきっかけづくり
34	「水と環境」をテーマにしたフォーラム	INPOひろしま生涯教育研究所	市民、環境カウンセラー、まちづくり担当職員	2003	広島市→水と環境の大切さを知る
35	水の都ひろしまモデルタイプ	広島市などをつくる実行委員会	市民	2003	広島市全体→水と環境の大切さを知る
36	広島市の花火大会統合	広島祭委員会	?	2003	花火大会→花火大会の存続
37	「にいのぼり」の水辺整備	国土交通省太田川河川事務所	エコロジー研究会ひろしま	2004	太田川放水水路河川敷→子供達が水遊びや自然観察ができる
38	ポプラの保存運動	市民グループ「セアック」	?	2004	ポプラ→再生保存
39	ポプラの立て直し	国土交通省太田川河川事務所	国土交通省太田川河川事務所、セアック、建設者	2004	ポプラ→再生保存
40	水辺デザインウォーク	セアック	専門家、市民約50人	2004	ポプラの再生活動→活動を盛り上げる
41	「にいのぼり」の水辺フェスティバル	エコロジー研究会ひろしま	広島市交流課、小学生80人	2004	地域住民→憩いの場として活用
42	ふれあいの水辺学習塾	エコロジー研究会ひろしま	地元の小学生80人	2004	地域住民→川や水に親しんでもらう
43	シジミ放流	広島市水産課	漁協	2004	広島市市民→潮干狩りを楽しんでもらう、太田川→水質浄化
44	雁木タクシーの運行	雁木組	市民ボランティア	2004	市民、観光客→広島の水辺の良さを考える
45	京橋川右岸オープンカフェ開設	水の都ひろしま推進協議会	市民、カフェ	2005	京橋川の右岸の商業利用→水辺に人々が集まるための仕掛け
46	稚ガニの放流	企画、広島市、太田川漁協	小学生と保護者44人	2005	子供→川にすむ生き物と触れ合ってもらう
47	「みる、きく、ふれる」2005国土建設フェスティバル	国土交通省中国地方整備局	学生、家族、出展：広島大学、企業127団体	2005	市民→防災学習
48	太田川再生プロジェクト	広島市	学識経験者、漁協NPO代表など16名	2006	太田川→1960年代の美しい姿に再生しまちづくりに役立てる
49	川まつり	川まつり実行委員会	?	2006	猿橋川周辺→賑わいを取り戻す
50	太田川ふるさとフォーラム	INPOひろしま生涯教育研究所	学識経験者、林業関係者	2006	市民→太田川との共生を考える
51	太田川水防演習	国土交通省中国地方整備局	警察、消防、流域市町、自衛隊、地域住民31機関約1500人	2006	流域住民など→大雨や台風などによる洪水に備えた防災訓練
52	川の歌集	水の都ひろしま推進協議会	?	2006	観光客→小学校の教育、川辺のコンサートで歌う
53	野外映画鑑賞会	PPC	?	2007	市民、若者→平和学習
54	浸水ハザードマップの作成	広島市	?	2007	市民→いち早い非難を促す
55	太田川せせらぎ学習塾	エコロジー研究会ひろしま	?	2007	市民→太田川の自然に触れ、水や生き物に親しんでもらう
56	シジミ稚魚放流	広島市水産課	漁協、雁木組	2007	市民→シジミ掘りを通じて太田川に親しんでもらう
57	太田川再生プロジェクト報告書提出	太田川再生プロジェクト検討委員会	広島市	2008	太田川→1960年代の美しい姿に再生しまちづくりに役立てる
58	市民フォーラム「アユの瀬上取り戻そう」	INPO法人環・太田川	学識経験者、広島市長、国土交通省太田川河川工事事務所	2008	市民→アユが遡上する川を取り戻す取り組みを話し合う
59	川遊び注意看板作り	小学校児童	基町地区安全推進連絡協議会、太田川河川工事事務所	2008	市民→二度と同じ事故が起きないように
60	リバーサイドイベントプロジェクト	広島市立大芸術学部学生	OB、若手アーティスト	2008	市民→開かれた芸術
61	太田川の堤防、護岸の安全点検	国土交通省太田川河川事務所	?	2008	市民の生活→洪水から守る
62	市民フォーラム「川ガキ、海っこ育てたい」	INPO法人環・太田川	市民70人	2009	大人→子供に自然を体験し力を伝える
63	川に学ぶ体験活動全国大会inひろしま	太田川河川事務所	広島県、広島市、参加者	2009	参加者、市民→河川に親しんでもらう
64	アユ稚魚放流	太田川漁協	?	2009	市民→解禁日に多くの川に楽しんでもらう
65	子供見守りカメラの設置	警察庁	防犯組織「カンクラブ」	2010	子供→犯罪から守る

※表中の色 地域社会:市民→赤 アソシエーション→黄色 行政→青

について、市民、アソシエーション、行政のそれぞれの「活動」に着目して整理すると、柳川はアソシエーションの「川下り」活動が中心であり、市民は、「川下り」の活動を支える「掘りし」や「川開き」といった活動や、水環境を考える活動団体「水の会」をつくるなどの取り

組みが見られた。また、行政は「幹線水路浚渫三カ年計画」や「河川浄化事業」「水辺の散歩道整備」「歩行者専用道路事業」など、掘割の環境を整える活動を行った。一方広島市の川まちづくりにおける地域社会の活動の変遷を同様に整理した結果、広島市の地域社会は、柳川と異

なり、中心となる水辺の活動がない一方で、市民、アソシエーション、行政がそれぞれ水辺を活かしたイベントや水環境に関するコミュニティづくりなどを行っていた。

3. 川まちづくりにおける 地域社会の活動の可視化

(1) 活動を可視化する手法

a) グループ・ダイナミクス理論

本研究で扱う G・D の概念は社会科学の理論であり、集団の基本的な性質・集団と個人・集団と集団、さらにはもっと大きな組織と集団の関係についての法則を実証的な方法によって明らかにしようとするものである。G・D における「グループ」とは、「これ以上切り刻んだらなくなってしまう何らかの全体的性質（集合性）を持つ人々とその環境の総体（集合体）」と定義される。要するに集合体は、DB における「活動に参加した地域社会」に当てはまる。集合体は基本的に動き、変化していく存在である。G・D はその集合体の動態を研究する分野である。一方、集合性の動態を「集合流」と呼ぶ。言い換えれば、一群の人々とその環境があいまって動いていく、その動き（流れ）が集合流である⁴⁾（図-3）。

b) 活動の基礎構造

本章では、先述した G・D の活動理論を活用して地域社会の活動の可視化を行う。本研究では、特に人間固有の活動の中の「主体」、「集合体」、「対象→結果」を活動の基礎構造と定義する。留意点としては、本研究において、「対象→結果」の項が、「活動の目的」として捉えていることである。なぜなら、「対象→結果」の項は、対象に対して求める結果を表しているため、これは、活動の目的になるといえるからである。

(2) 各対象地の地域社会の活動の可視化

a) 縦軸と横軸の設定

地域社会の活動の変遷を可視化するために必要となる軸は、まず「時間軸」である。これは柳川に合わせて時間軸を 1950 年から 2010 年までに設定し、縦軸とした。次に、必要な軸は横軸であるが、横軸を決定するにあたって、まず、表-1、表-2 の DB の項目の「活動の対象」に関して分析した。その結果、本研究における活動の「目的」の「活動の対象」にあたる部分は、3 つに分類することができた。具体的には、活動の対象が川づくりや水辺づくりなどの「社会基盤」に関する活動の場合、



図-3 グループと集合流

市民や参加者などの「地域内」に向けての活動である場合、観光客などの「地域外」へ向けての活動である場合の 3 つである。これらの関係は、「社会基盤」が「地域内」や「地域外」に向けた活動の舞台、すなわち川まちづくりの舞台となるといえる。よって、「社会基盤」を中心に「地域内」、「地域外」へ向けた活動が行われる場合がある。反対に、「地域内」、「地域内」へ向けた活動の舞台となる「社会基盤」に関する活動が行われる場合もあるといえる。

横軸は左側を「地域内」に向けての活動、右側を「地域外」に向けての活動とし、両者の中間にある活動を「社会基盤」に関するものとした。

b) 活動の可視化

地域社会の活動の可視化は、まず、1 つの活動について、「発足年」、「活動名」、活動の「継続」、「中止」、「再開」などを明記した。特に、活動の「継続」については、「毎日、もしくは毎週」継続して行われているか、「毎年」継続して行われているかを明記した。また、各活動の主体については、G・D の三角形の色を市民が主体の場合は「赤」、アソシエーションが主体の場合は「黄」、行政が主体の場合は「青」系統の色で明記した。（図-5、図-6、図-7）このように、地域社会の活動の変遷を可視化する上で、上記のような条件を設定することで、地域社会の活動の「集合流」が分析できると考えられる。以下、上記のような条件を満たすように柳川、広島川の川まちづくりにおける地域社会の活動を可視化した（図-5、図-6、図-7）。

4. 地域社会の協働過程に関する考察

(1) 柳川地域社会の分析

a) 柳川地域社会の集合流の変化

図-5 より、柳川地域社会の集合流を把握した。まず、2 章で示したように地域社会の活動の中心は、柳川の観光の中心である「川下り」活動である。これは、「地域外」に向けた活動に属する。そして、この「川下り」活動を継続的に行うために、川の消毒を行う「掘り干し」や 1 年の川下りの始まりを祝う「川開き」の活動が行われており、これらの活動は「川下り」活動を支えている活動であることが分かる。

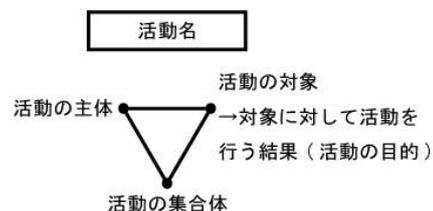


図-4 活動の基礎構造

次に、1970年から1980年間の地域社会の集合流は、「地域外」に向けた活動から「社会基盤」に関する活動と変化していることが特徴的である。具体的には、掘割の汚染に伴い行われた、「幹線水路浚渫三ヶ年実施計画」や「河川浄化事業」がこれにあたる。

そして、1980年から1990年間の地域社会の集合流は、「社会基盤」に関する活動から「地域内」に向けた活動へと変化していることが分かる。具体的には、「全国水郷水都会議」や「筑後川フェスティバル」などの市民から参加者を募って環境を考えるコミュニティを作る活動がこれにあたる。また、「地域外」に向けた活動にも集合流が変化していることが分かる。具体的には、「水辺の散歩道」や「歩行者専用道路」を整備するなどして親水性を高めるための水辺空間の整備の活動であり、これらは「川下り」を楽しむ観光客のための活動であるといえる。

さらに、1990年から2000年までの地域社会の集合流は、「地域内」に向けた活動へ進んでいることが分かる。「水の会」や「水憲法制定委員会の発足」、「小学校教育に川下りを取り入れる」などの1980年から1990年間にわたる水環境を考えるコミュニティづくりの活動から、実践的な活動へと変化していることが分かる。

最後に2000年以降の地域社会の流れは、「地域内」、「地域外」に向けた活動にも変化していることが分かる。具体的には、掘割の水辺空間を利用した「水辺のカウントダウン」や掘割沿いの環境を市民と行政で手を加えてさらに良い環境へとするための「花のプランター設置」などの活動がこれにあたる。また、地域外の領域では、「新しい体験型観光の提案」などのこれからの柳川の観光をよりよくしていくための活動も起こっている。これらは、2000年までに整えられた水辺環境とそれに関わるコミュニティの発達が影響していると考えられる。

このように、柳川地域社会は、「地域外」に向けた活動から「地域内」に向けた活動、「社会基盤」に関する活動へ変化した集合流が、近年ではまた「地域内」に向けた活動へと変化していることが分かった。

b) 柳川地域社会における主体と集合体の変化

次に、柳川地域社会の集合流の変化に基づく主体と集合体の変化について図-5を基に整理した(表-3)。まず、1960年代の集合流は「地域外」に向けた活動が中心で、活動の主体は、アソシエーションが中心になっている。その中で活動の集合体は、アソシエーションと行政という場合が多い。次に、1970年代の集合流は「社会基盤」に関する活動へと流れ、活動の主体は行政が中心になっている。集合体は行政と市民という場合が多い。そして、1980年代の集合流は、「社会基盤」に関する活動と「地域内」へ向けた活動へと流れている。「社会基盤」に関する活動の集合流の活動の主体は、アソシエー

ションが中心で、その場合、集合体はアソシエーションと行政という場合が多い。「地域内」へ向けた活動の場合も同様に、集合流の活動の主体は、アソシエーションが中心で、その場合、集合体はアソシエーションと行政という場合が多い。さらに、1990年代の集合流は「地域内」へ向けた活動へと流れ、活動の主体、集合体は市民中心へと変化している。最後に2000年代は、集合流が「地域外」へ向けた活動へと戻り、活動の主体も市民中心で、集合体は行政と市民という場合が多くなっている。

このように、柳川地域社会は、活動の主体が行政やアソシエーション中心だったものが、近年では市民主体へと移り変わっていることが分かる。これは柳川の社会的背景で、川下りというアソシエーション主体の現在まで続く活動があり、1970年代から1980年代掘割が汚染され、市民を中心に掘割浄化する活動を行った歴史がある。このことから、近年の柳川地域社会の集合流の変化期において市民が重要な役割を担っていると考えられる。

(2) 広島地域社会の分析

a) 広島地域社会の集合流の変化

図-6、図-7より、広島地域社会の活動の集合流を分析した。まず、1990年(平成2)以前の地域社会の「集合流」は、「地域内」、「地域外」へ向けた活動が中心である。具体的には、「地域内」へ向けた活動は、「イカダ下りカワニバル」や「広島市民レガッタ」、 「地域外」へ向けた活動は、市民や観光客を楽しませるための「太田川花火大会」などのイベント性の強い活動がある。また、「地域外」へ向けた活動は、「定期遊覧船」のような、川を使った観光舟運が継続的に行われていることも1990年以前の地域社会の集合流の1つとして特徴的である。これらの特徴として、現在まで続いているような継続的な活動が多いといえる。

次に、1990年から2000年間の地域社会の集合流は、「地域内」へ向けた活動、「社会基盤」に関する活動に変化していることが分かる。「地域内」へ向けた活動は、「水生生物の放流」や太田川に「こいのぼりを掲げる」などして、水環境を市民に考えてもらうための啓発活動などがある。また、「太田川子供モニターサミット」や「太田川の自然と水を考える集い」などの市民から参加者を募って、環境を考えるコミュニティをつくる活動などもあげられる。次に、「社会基盤」に関する活動は、「元安川の橋詰整備」や「親水テラス整備」などの水辺環境の整備に関する活動と、それに伴い、水辺環境を活かすための「オープンカフェの社会実験」などがある。このように、水辺を活用するための活動が起こっていることも広島地域社会の大きな集合流の1つだといえる。最後に、2000年以降の地域社会の集合流は、「地域内」へ向けた活動、「社会基盤」に関する活動、「地域外へ

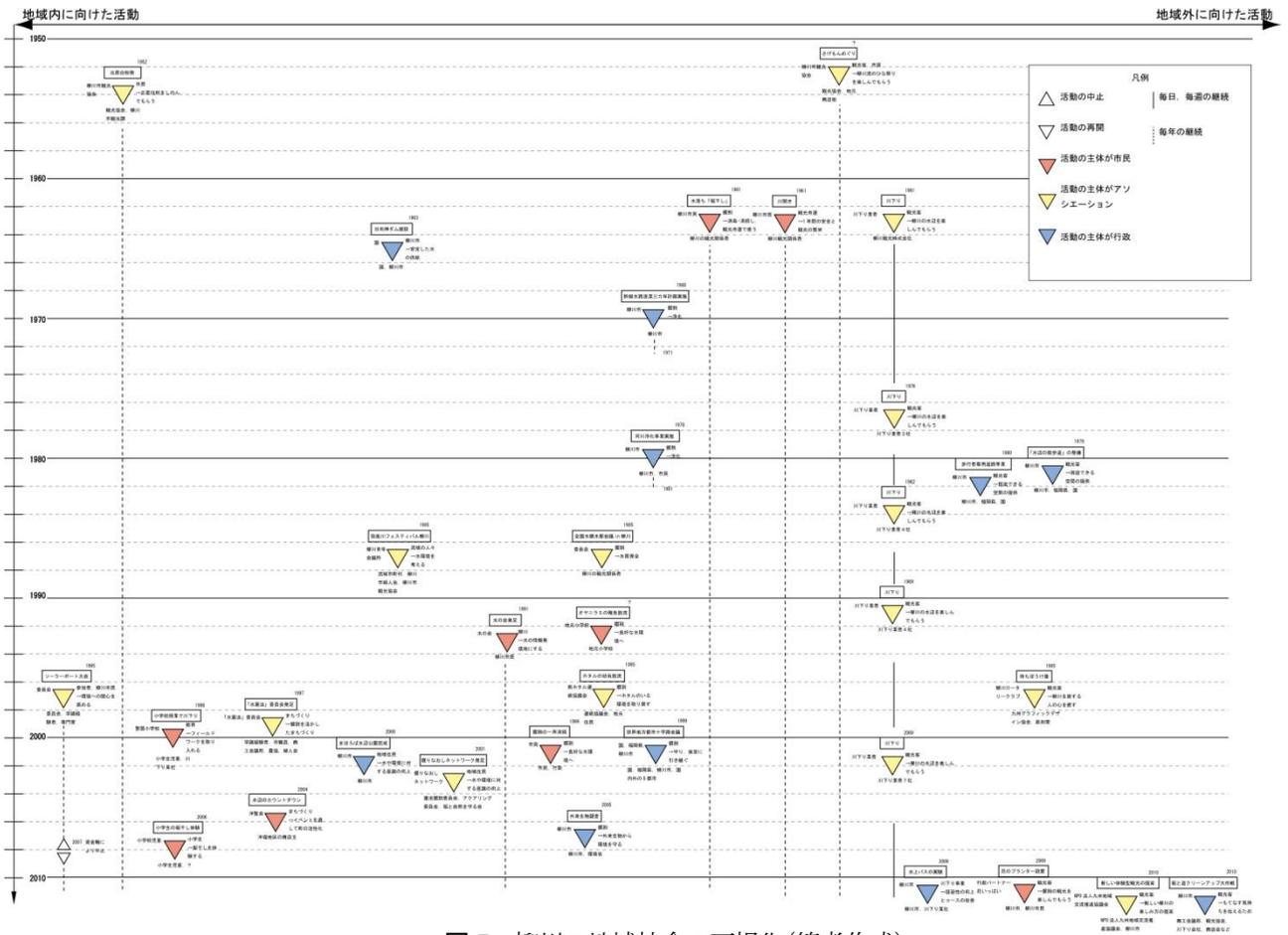


図-5 柳川の地域社会の可視化(筆者作成)

表-3 柳川の地域社会における主体と集合体の変化

年代	集合流	主体の中心	集合体
1960	地域外	アソシエーション	アソシエーション、行政
1970	社会基盤	行政	行政、市民
1980	社会基盤	アソシエーション	アソシエーション、行政
1990	地域内	アソシエーション	アソシエーション、行政
2000	地域外	市民	行政、市民

表-4 広島県の地域社会における主体と集合体の変化

年代	集合流	主体の中心	集合体
1990以前	地域外	アソシエーション	アソシエーション、市民、行政
	地域内	アソシエーション	アソシエーション、市民
1990	地域内	アソシエーション	アソシエーション、市民、行政
	社会基盤	行政	アソシエーション、市民、行政
2000	地域内	市民	市民、アソシエーション、行政
	社会基盤	行政	アソシエーション、行政
	地域外	アソシエーション	市民、アソシエーション

向けた活動」の全てに広がっていることが分かる。まず、「地域内」へ向けた活動は、防災、環境に関するコミュニティづくり、環境啓発活動など多様である。次に、「社会基盤」に関する活動は、河川敷にあるシンボルである「ポプラの木を保存」する活動のように市民団体が中心となって行われる活動が特徴的である。最後に、「地域外」へ向けた活動は、2004年から「雁木タクシー」の運行を始めた雁木組の活動が特徴的である。2007年(平成19)に土木学会推奨土木遺産にも選定され、広島の歴史的な遺産である雁木群を保存するための活動も起きている。

このように、広島県の地域社会の集合流は、2000年以降から現在にかけて活動の対象が広がっていることが大きな特徴であるということが分かる。

b) 広島県の地域社会における主体と集合体の変化

広島県の地域社会の集合流の変化に基づく主体と集合体の変化について図-6、図-7を基に整理した(表-4)。まず、1990年以前の集合流は「地域内」へ向けた活動と「地域外」へ向けた活動が中心で、その中での活動の主体は、アソシエーションで、集合体に行政や市民が加わるという場合が多い。次に1990年代の集合流は、「地域内」へ向けた活動と「社会基盤」へ向けた活動へ流れ、活動の主体はそれぞれアソシエーション、行政が中心になっている。そして、活動の集合体の中にそれぞれ市民が加わるという場合が多くなっている。2000年代の集合流は、すべての集合流に流れている。

このように、広島県の地域社会は、特に「地域内」へ向けた活動の主体に市民が登場したことが特徴的である。また、活動の主体がアソシエーションや行政中心であった活動が近年、特に2000年以降は、全ての集合流が流れ、「地域内」へ向けた活動では市民、「社会基盤」に関する活動では行政、アソシエーション、「地域外」へ向けた活動ではアソシエーションが主体となって活動を行っている。1990年代から2000年代にかけての大きな変化は、「地域内」に向けた活動の主体に市民が登場し、

地域内に向けた活動

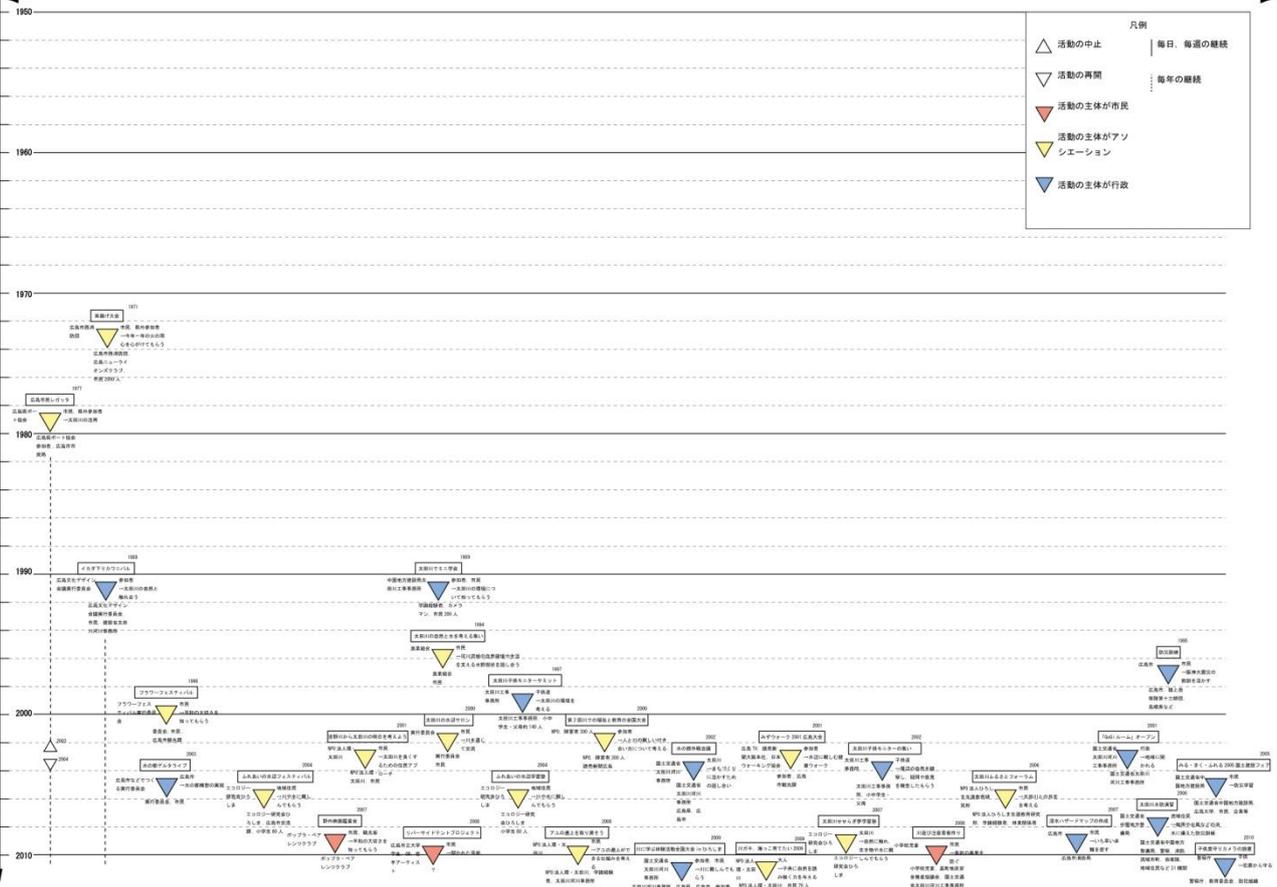


図-6 広島地域社会の可視化①(筆者作成)

地域内に向けた活動

地域外に向けた活動

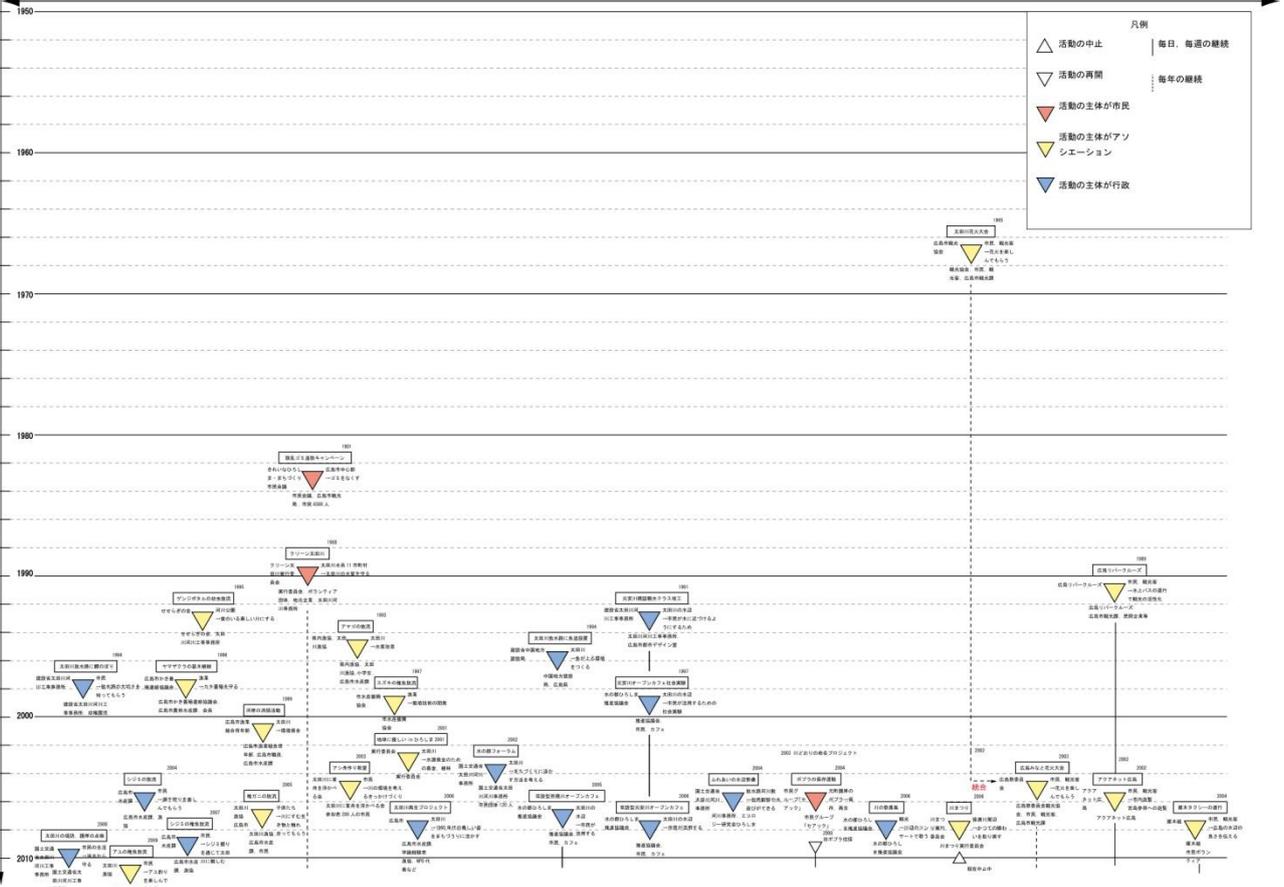


図-7 広島地域社会の可視化②(筆者作成)

「地域内」に向けた活動が活発に行われるようになったことである。このことから、近年の広島地域社会の集合流の変化期において市民とアソシエーションが重要な役割を担っていると考えられる。

(3) 各対象地における地域社会の集合流の変化の過程

a) 柳川の地域社会の集合流の変化の要因

柳川の地域社会の集合流や活動の主体の変化の中で特に大きな変化は1990年代であることが分かった。その中でも1980年代の掘割浄化の活動をきっかけに発足した1990年代の市民主体の活動である「水の会」の活動について整理した。1978年（昭和53）に、柳川市で行われた住民参加の河川浄化事業で大勢の人との交流が生まれ、1980年（昭和55）に「八女・山門研究会」が発足した。この研究会では、矢部川流域の水環境に関する様々な活動が行われた。まず、「水の会」は、矢部川の下流から上流までを歩いて観て回ることから始まった。それ以降の活動は、流域の歴史、文化、産業、高齢化社会などへの対応など多種多様な分野まで及んでいる。「八女・山門研究会」は、上流から下流までの様々な活動を通して流域の人々の交流を深めていった。そして、1989年（平成元）の「全国水郷水都会議」が開催された。この会議では、1200人を超える参加により多くの人の交流が生まれた。この成果を踏まえて活動を継続していこうと、1991年（平成3）8月1日「水の日」を記念して「水の会」が発足した。以降水の会は、学習会、潮干狩りなどの活動を通して様々な交流が生まれた⁵⁾。

(2)柳川の地域社会の集合流の変化の要因

図-5を踏まえ、柳川の主な集合流の変化を活動の「道具」の面において可視化し、集合流の変化の要因について考察した（図-8）。

もともとあった「地域外」へ向けた活動（川下り活動）の存続のために、「社会基盤」に関する活動（河川浄化

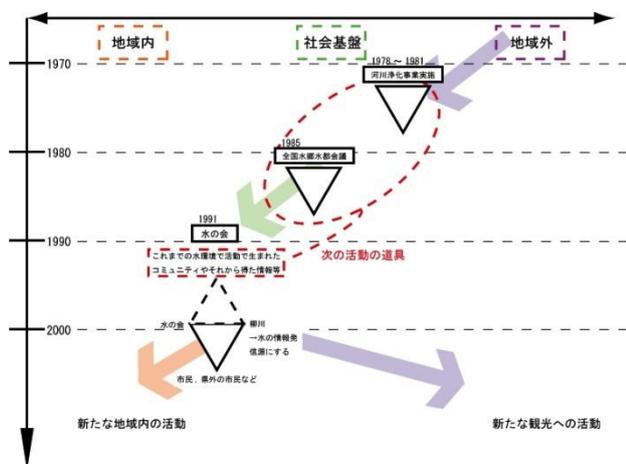


図-8 柳川の集合流の変化の過程の分析

事業、全国水郷水都会議など）へと集合流が流れた。それら「社会基盤」に関する活動で得られた成果（交流や情報）が、市民を主体として発足した水の会の活動の「道具」になっていると考えられる。そして、水の会の活動から「地域内」へ向けた活動や「地域外」へ向けた活動へと集合流が流れる。

このように、柳川の川まちづくりは、汚染された掘割を浄化した経験や、経験から派生した全国水郷水都会議などのコミュニティが次の市民の活動を行う上での「道具」となり、現在の「地域内」へ向けた活動や「地域外」へ向けた活動を集合流とした様々な活動や行政の政策や計画を生み出したと考えられる。

このように、「道具」とは、その変化期以前の活動の経験から得た知識などのこれまでの地域社会が「培ってきたもの」、「引き継がれてきたもの」があり、地域社会が協働して活動を行ううえで1つの重要なことであると考えられる。

b) 広島地域社会の集合流の変化の要因

広島地域社会の集合流や活動の主体の変化の中で特に大きな変化は2000年代であるといえる。よって、2000年代に「地域内」、「地域外」の集合流で活動する市民、アソシエーションの一部の活動について整理した。

a)市民主体の活動の例：CAQ

広島市民を主体とした活動団体、セアック（以下、CAQ）、ポップラ・ペアレンツ・クラブ（以下、PPC）の活動についてホームページの活動記録やヒアリングの内容を基に整理した⁶⁾⁷⁾。CAQは、基町地区の河川敷の通りの名前を付けることで地域を活性化させようという「川通の命名プロジェクト」をきっかけに活動が始まった。以降、基町地区の玉石護岸周辺の河川敷にあるポップラの木を保存するための活動を行った。2006年（平成18）に太田川河川工事事務所と管理協定を結び、PPCとしてポップラの保存活動を行ってきた。その他にも、2007年（平成19）から基町の河川敷で野外映画鑑賞会を行うなど、市民団体として様々な分野で活動を行っている。この、CAQやPPCは、「水辺の市民活動助成事業」の助成を何度も受けるなど、市民活動団体としては行政からの信頼も受けていると考えられる。

b) アソシエーション主体の活動の例：NPO法人雁木組

広島のアソシエーションを主体とした活動団体、NPO法人・雁木組の活動について活動記録やヒアリングの内容を基に整理した。NPO法人・雁木組は、2004年（平成16）にNPO法人化し、NPO法人として水上タクシーの運行活動を始める。その後、雁木の歴史調査や保全活動環境に配慮したBDF燃料の使用、小学校と連携して環境学習活動を行うなどこの活動団体も様々な分野に及んだ。また、雁木組は内水面漁協や広島市、jazzアーティスト、

広島文化財団など様々な主体との協働での取り組みを行っている。太田川シジミのPR活動、ノーマイカーデーの協賛、灯籠流しの回収、水辺ジャズなどがその例である。また、川で舟を運航するという行為は様々な問題があるが、運輸局や広島市などの行政からは、「水辺で活動を行う上でのルールをきちんと守って活動している」という評価を受けている。⁷⁾ このように、NPO法人・雁木組は、他の民間業者で行う舟運とは異なり、様々な分野に及ぶ活動を行っており、行政や他の団体とも協働して活動を行うアソシエーションである。なお、雁木組は、CAQやPPCとは異なり、行政からの助成や支援をほとんど受けずに活動している団体であることが特徴的である。

(2) 広島の地域社会の集合流の変化の要因

図-6、図-7の内容を踏まえ、広島の主な集合流の変化を活動の「道具」の面において可視化し、集合流の変化の要因について考察した(図-9)。

PPCの活動における「道具」の1つは、水辺の市民活動助成があると考えられる。これは、川や海などの水面及び水辺の空間を市民の創意工夫などを、最大限生かす空間として活用し、都市の新たな魅力を演出する水辺での市民活動を促進するための行政の市民の活動に対する支援である。また、国土交通省太田川河川事務所との管理協定は、「愛される水辺の創出」のために官民が連携して行う活動のあり方について基町環境護岸のポプラの再生における取り組みの経験を生かし、今後の課題の検討や地域への活動普及のための方策などを確立することを目的とする。⁸⁾ とある。このように、実際の河川の管理を行う河川行政と協定を結ぶことにより、PPCの活動の目的である河川敷のポプラの保存活動を円滑に進めていると考えられる。

また、NPO法人雁木組の活動における「道具」は、雁木タクシーといった物理的なものもあるが、運輸局からの川の利用許可や、雁木に関する知識、船長の経験など

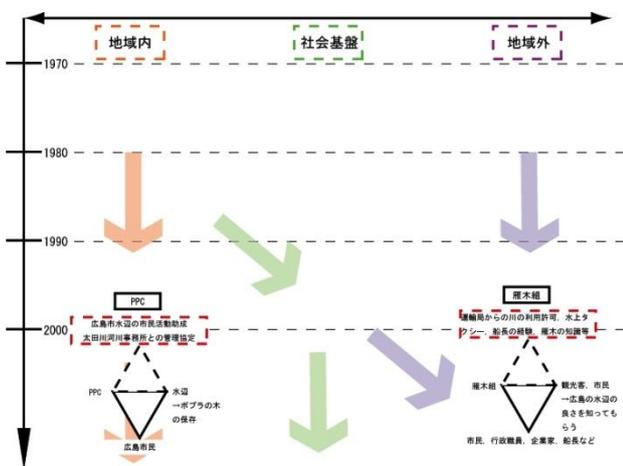


図-9 広島の集合流の変化の過程の分析

様々である。雁木の知識などは、専門家や地元の市民などの協力を得て調査した結果、雁木組の貴重な情報としてIT化し、現在のタクシーの運行を支えている。また、船長の経験は、一度民間の会社の舟を降りた船長を雇って雁木タクシーの船長として舟の運航を支えるベテランの船長が、新しい船長を育てるなどの雁木組の中の教育システムを支えている。⁹⁾

しかし、雁木組の生命線ともいえる河川の利用においては、行政からは、安全面で懸念されたが、安全な運行を続ける中で、実績を作り上げた。その結果、行政からは、雁木組の河川の利用において信頼を受けるようになった。よって、雁木組が活動を行う上で最も重要なのは、「行政からの信頼」だと言える。

以上のように、広島の地域社会における上記のような活動を生み出した要因は、地域社会の集合流の変化期における活動の「道具」を分析した結果、「行政の支援システム」や「行政からの信頼」が1つの要因になると考えられる。

(4) 地域社会の協働に必要な要件に関する考察

a) 柳川の地域社会における行政の役割

柳川の「水の会」の活動後における柳川の行政の計画や政策に着目すると、2007年(平成19)の「掘割を守り育てる条例」と2009年(平成21)の「掘割を生かしたまちづくり行動計画」がある。以下、これらを整理した。

この条例は、市民が、柳川市の良好な水環境を保全し、掘割を生かしたまちづくりを進めるための水の憲法ともいえる条例である。具体的には、市民、事業者、行政と柳川における地域社会を定義し、それぞれの責務を掲げたり、市民参加による水環境保全活動の意欲を高めるための「掘割の日」を設けている。また、市民が自発的に行う水環境に関わる活動を促進するために、必要な措置を柳川市が行うようこの条例で定めている。¹⁰⁾ よって、この条例は、柳川における地域社会のそれぞれの役割を示した上で、様々な市民活動を支援する条例だといえる。

さらに、掘割を生かしたまちづくり行動計画は、柳川市掘割を守り育てる条例の方針を具体的な行動に移すために策定された。具体的には、水環境の保全においては、流水の確保、掘割・水利施設の整備と管理、水質の浄化、流域の連携、生態系の保護などの項目に分け、事業や活動名とその役割分担を示している。同様に水郷景観の継承においては、水郷景観の保全と創造、水辺空間の保全と創造、緑地の保全と創造などの項目に分けている。掘割を育てる実践行動においては、様々な世代への環境教育の推進、情報の共有化、市民協働による実践行動の推進、循環型社会の形成などの項目に分けている。¹¹⁾

このように、柳川の行政は、水の会の発足に至るまでの活動における成果が行政を動かし、条例や計画という

形で現れたものであるといえる。

b) 広島地域社会における行政の役割

広島地域社会の活動の「道具」である「行政の支援システム」や「行政からの信頼」を明確にするために、広島の「PPC」や「雁木組」が発足した頃の行政の政策や計画に着目し、活動との関係を考察した。

その結果、2003年（平成15）の「水の都ひろしま構想」（以下、構想）があった。その中に、PPCの活動の道具となった「水辺の市民活動助成事業」がある。これは、2003年から2010年まで行われ、この事業を契機として、市民のアイデアを生かした事業の掘り起こしや、新たな活動団体の立ち上げのために、助成金を交付する事業である。¹²⁾ これより、58の市民やアソシエーションを主体とした水辺での活動がモデル事業として行われた。その中でも、PPCはこれを契機に現在も活発に活動を続けている団体の1つであるといえる。このことから、この事業は、水辺における市民活動の促進のための行政の支援システムだといえる。

また、雁木組は、この構想の中の「水の都ひろしま推進計画」（以下、推進計画）における「水辺利用のルール」の影響を受けていると考えられる。この中で、河川区域の許可使用の中の「占用許可基準「河川敷地占用許可準則」に基づき、公共性、公益性を持った活動が優先されている」とある。このことから、雁木組の活動も行政側においては、公共性のある優先される活動として認識されていることが分かる。

このように、雁木組に対する行政の信頼は、雁木組は、「河川の利用において、公共性のある優先される活動」という行政の認識であると考えられる。

(5) 地域社会における政策・計画の位置づけ

以上のように、地域社会の協働における行政の役割は、柳川のような小規模都市では、これまでの地域社会の活動における成果を政策や計画として形にすることであると考えられる。また、広島のような大規模都市では、これからの地域社会を支援・管理するシステムを組み入れた政策や計画を作ることであると考えられる。

5. まとめ

本研究では、グループ・ダイナミクス理論を活用し、地域社会の活動を可視化することで、2つの地域の川まちづくりの変遷を明らかにした。その結果、次のような分析や考察を行ったうえで、地域社会の協働に必要な要

件を考察した。まず、地域社会の集合流の変化とその変化に伴う活動の基礎構造の変化を分析した。次に、その集合流の変化の要因を探る上で、活動の「道具」について分析した。そのうえで、活動の「道具」となる行政の政策や計画から川まちづくりにおける地域社会についての行政の役割について考察した。

地域社会の協働における行政の役割は、柳川のような小規模都市では、これまでの地域社会の活動における成果を政策や計画として形にすることであると考えられる。また、広島のような大規模都市では、これからの地域社会を支援・管理するシステムを組み入れた政策や計画を作ることであると考えられる。

謝辞：

研究の調査にあたり、柳川市建設部環境課の古賀氏、乗富氏、広島では、NPO法人雁木組の氏原氏、三原氏、広島市都市活性局観光交流部交流課の勢良氏、梶原氏、広島市市民局市民活動推進課の山崎氏に資料の提供などの協力を頂いた。ここに記して謝意を表する。

参考文献

- 樋口明彦・佐藤直之・高尾忠志：まちの活性化を促す都市河川整備のあり方に関する研究，土木計画学研究・論文集，Vol.22No.2，pp.387-396，2005
- 出口良知・坂井文・越沢明：徳島市新町川における河岸公園整備を契機としたまちづくりの展開についての一考察，ランドスケープ研究，Vol.72(5)，pp.701-705，2009
- 住吉徹・包清博之：柳川市の水郷景観保全のための計画区域に関する基礎的研究，ランドスケープ研究 vol.70(5)，2007
- 丸茂悠・菊池成朋：水郷柳川における掘割空間の状況と水路に関する施策の影響，日本建築学会計画系論文集，第603号，pp.1-7，2006
- 宮本智恵・出口敦：柳川の生活景を支える掘割の水制御装置と空間構成に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp.31-34，2007
- 財団法人リバーフロント整備センター：日本の水郷・水都，pp.28-33，2006
- 杉万俊夫：コミュニティのグループ・ダイナミクス，京都大学学術出版，pp.19-22，2006
- 広松伝：よみがえれ！“宝の海”有明海，pp.71-133，藤原書店，2001
- CAQ：CAQHP，<http://www.009.upp.so-net.ne.jp/caq/ppc.html>
- 広島市市民局観光交流部交流課：ヒアリング，2010年12月16日午前10：00～11：00
- 雁木組：ヒアリング・提供資料（活動記録）
- 前掲，94
- 前掲，96
- 柳川市：柳川市掘割を守り育てる条例，http://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/reiki_int/reiki_honbun/ar20308231.html，2007
- 柳川市：掘割を生かしたまちづくり行動計画，pp.11-37，2009
- 国土交通省・広島県・広島市：水の都ひろしま推進計画 pp.10-11，2009